

パニウム-第十八号

二百五十の三倍

Jeff Pippenger

2026-02-25

ここで、ダニエル書11章12節のいくつかの含意を考察し、その後、紀元前200年のパニウムの戦いにおいて成就した、同章11節から15節の歴史に『250』年の三本の線を導入する。紀元前457年に始まる『250』年の線は、ラフィアの戦いに始まりパニウムの戦いに終わる期間の中間に当たる紀元前207年に終わる。ネロの線における『250』年は、313年・321年・330年により表されるコンスタンティヌスの三段階の歴史をもって終わる。アメリカ合衆国の『250』年は2026年7月4日に終わる。

ネロの線は、まずアメリカ合衆国において、次いで世界において、「獣の像」の試練の時の歴史を表している。紀元前457年の線は、二つの会戦のあいだにおける軍事上の中間点にトランプを位置づける。1776年から続く期間もまた、トランプの最後の大統領任期にとっての中間点を画する。これらの線を適切な位置に置くために、まず第十二節と、ロシアおよびプーチンの没落を取り上げる。そののち「250」年の三本の線、次いでハスモン朝の線を扱う。これらの線が定まれば、ペテロをパニウムと整合させて位置づける。これらの線が整えられたとき、2020年7月18日のメッセージがいかに修正され、宣言されるべきか、そしてそれがヨエル書のメッセージであることを、私たちは認識できるはずである。

ユダの王ウジヤおよびエジプト王プトレマイオス

ラフィアの戦いにおいて第十一節が成就したという歴史は、ウジヤ王の歴史と整合する。イザヤが清められ、後の雨のメッセージを宣言する権能を授けられたとき、彼の召命はウジヤが死んだ年に臨んだ。

ウジヤ王が死んだ年に、私はまた、主が高く掲げられた御座に座しておられるのを見た。その衣の裾は神殿を満たしていた。イザヤ書 6:1

ウジヤの死に先立ち、彼が示した反逆は、ラフィアの戦いの勝利直後におけるプトレマイオスの反逆と並行し、軌を一にしていた。ウジヤとプトレマイオスは、心が高ぶり、国家権力と教権を結合させようとすることによって反逆する南の王の象徴である。ウジヤが政教一致を試みたとき、彼の額に生じたらい病は、獣の刻印を予表していた。

また、第三の天使が彼らに続いて、大声でこう言った。だれでも、獣とその像を拝み、額に、または手にその刻印を受ける者がいるなら、その者は、薄められることなく神の憤りの杯に注がれた神の怒りのぶどう酒を飲むことになり、聖なる天使たちの前で、また小羊の前で、火と硫黄によって苦しめられる。そして、その苦しみの煙は世々限りなく立ち上り、獣とその像を拝む者、またその名の刻印を受ける者は皆、昼も夜も安らぎがない。黙示録 14:9-11

こうしてウジヤは、政教一致を図る反逆的な企ての時から、漸進的な死を象徴する。さらに彼は、子との十一年間にわたる実権を欠いた共治を象徴する。ウジヤはその反逆の後、十一年間生存した。彼の反逆の始まりは、政教一致がなされ、獣の印が強制される日曜法を象徴する。十一年後、彼は死に、それは南王国ユダの王としての治世の終焉を表す。この南王国ユダは栄光の地、すなわちアメリカ合衆国である。

プトレマイオスとの預言的關係において、ウジヤはユダ（すなわち栄光の地）および背教的プロテスタンティズムを表し、これに対してプトレマイオスはエジプトを表す。エジプトは竜の勢力であり、その宗教は心霊主義である。この二人の王を並行して考えるなら、ウジヤは栄光の地の象徴であることをやめ、両者を合わせて二つの国家の象徴となる。エジプトとユダは、それぞれ心霊主義と背教的プロテスタンティズムという宗教の象徴である。彼らはまた、国家と教会の象徴でもある。ひとつの象徴として彼らを並置するとき、彼らが体現する政治権力と教会権力は、メディアとペルシア、フランスの「エジプト」と「ソドム」、アメリカ合衆国の「共和政主義」と「プロテスタンティズム」という二本の角、北王国イスラエルと南王国ユダ、さらに異教ローマと教皇ローマの場合にそうであったように、二つの国家から成っている。二つの王国の象徴として、ウジヤとプトレマイオスがともにいけにえを献げようとしたエルサレムの神殿によって、彼らは預言的に結び合わされている。同じ聖所に対してともに反逆する二つの国家である。

両王の反逆がエルサレムの神殿に関わるものであったことに留意することは重要である。その神殿は、ダニエルが第十章でキリストを見た神殿の象徴である。両王の歴史はウクライナ戦争において一致し、こうして彼らの証言は2014年に始まる。両者とも、第十一節におけるラフィアの戦いによって表象される軍事的勝利によって高められた。ラフィアは、聖書予言における第六の王国ならびに日曜法の三重の連合の境界地帯を画する。また、それは戦う教会から勝利の教会への移行の境界でもある。

2014年以後、最も富める王は2015年に大統領選への出馬の意向を表明した。2020年には、共和党の角を代表する最も富める王が、のちに癒やされる致命的な傷を受けた。2022年にはウクライナ戦争が激化した。その後トランプは、2024年の選挙において、第十三節の成就として復帰した。2023年7月には、荒野に叫ぶ声が発せられた。2023年12月31日にはプロテスタントの角が復活し、またトランプが復帰した2024年の選挙において、共和党の角も同様に復活した。そして2025年には、神殿の試験の到来をもって、基礎の試験が終結した。

1989

1989年に封印が解かれた真理は二つあった。改革運動における預言的な並行関係と、ダニエル書十一章の最後の六節とは、同時に封印が解かれた。四十節の当初のメッセージを確立するために、特定の預言解釈の規則が用いられた。それらのまさに同じ真理のいくつかは、今や、そうした預言の珠玉が見いだされたまさに同じ四十節の隠された歴史を解く鍵となっている。以下に一例を示す。

1989年当時、アドベンチズムにおいては、ダニエル書の最後の六節が何を表しているのかについての統一的理解は存在しなかった。その不統一には二つの側面があった。すなわち、これらの節の意味について合意がなく、また、これらの節を理解していると公言す

る者たちは、背教的プロテスタンティズムおよびカトリシズムの神学と混合された人間の見解を提示した。彼らが混合したその神学は、1863年の反逆における彼らの先祖から彼らが長子権として受け継いだ嗣業であり、その反逆において先祖たちは、ヤロブアムの根本的的反逆における不従順な預言者の役割を成就したのである。そうした節についての個々の見解は、せいぜい私的解釈にすぎなかった。彼らの当該節に関する見解は、基本的な預言的適用に反するものであり、しかも、しばしば、彼ら自身がその節について自ら定めた前提そのものにも背いていた。

これらの聖句の中に私たちが見出したのは、六つの聖句すべてにわたる首尾一貫した理解であった。私の理解をアドベンティズム全体が退けていることを知りながらも、私が自らの理解を提示するに至ったのは、私たちが見たメッセージのその一貫性にほかならなかった。これらの聖句について私たちが得た理解は最初に1996年に公表され、そこで提示した理解は、その後三十年余の歳月が流れる中で、ますます強固なものとなってきた。

雑誌『The Time of the End』の冒頭の最初の参照先は『Testimonies』第9巻11ページである。9/11の五年前に、その雑誌は9/11で始まっている。私を励ました理解の一つは、四十節の「終わりの時」において、北の王と南の王は文字通りの権力ではなく、霊的な勢力であるという理解であった。その時すでに、私は、ホワイト夫人が、ダニエル書と黙示録とは同一の書物であり、ダニエルにある同一の預言の筋道が、黙示録においてヨハネによって取り上げられていると言っていることを知っていた。私は、1798年の「終わりの時」を取り巻く歴史の中で成就した黙示録11章において、当該章に関するホワイト夫人の注解が、フランスは霊的なエジプトであったと明確に教えていることを見いだした。また、彼女は、黙示録17章において獣の上に座す淫婦が霊的なバビロンであることについても、同様に明確であった。

ホワイト夫人によるその二つの勢力の同定は『各時代の争闘』に見られ、その言明はヨハネとダニエルの証言を結び合わせている。ダニエル書第十一章における南の王の定義はエジプトを支配する勢力であり、北の王はバビロンを支配する勢力である。聖書と預言の霊が歩調を合わせ、ダニエル書と黙示録を結び合わせてその論旨を立証し、真理を打ち立てているという事実は、誤った神学者や、自給的宣教団体の自己任命の誤れる指導者のいずれに対しても、私が決して譲り渡すことのできないものであった。

プトレマイオスとウジャヤを、ラフィアの戦いと、彼らの心が高ぶった後に生じる余波の象徴として理解するという事は、次の事実に従うことである。すなわち、プトレマイオスは、ローマの代理勢力を打ち負かす竜の勢力を表すが、結局は、10節および1989年にプトレマイオスを打ち負かした代理勢力に敗北する。歴史的な区別は意図的であり、重要である。

ウジャヤは、教会と国家を結びつけようとしたときに獣の刻印を受ける。ウジャヤは「麗しの地」であり、そして「麗しの地」は、1989年におけるそのメッセージの初期において主要な論点であった。「麗しの地」はアメリカ合衆国なのか、それともセブンスデー・アドベンチスト教会なのか。当時、「麗しの地」をアドベンチスト教会とする誤った見解を抱いていた者たち、そして今なおそう考える者たちは、四十五節の「聖なる麗しい山」は明らかに神の教会であると主張し、したがって彼らにとっては、山と地とは同一の象徴

であることになる。標準的な人間の推論であろう。

ウジヤは栄光の地であり、プトレマイオスはエジプトである。ウジヤは栄光の地として、プロテスタント主義と共和主義という二本の角を有する。プトレマイオスの政治的顕現は共産主義およびその多様な形態であり、プトレマイオスの宗教的顕現は心霊主義およびその多様な形態である。竜の勢力の特徴は、それが連合体であることである。しかし、栄光の地である偽預言者は、二本の角を有する単一国家である。

ダニエル書十一章四十節は、1989年にソビエト連邦が押し流された時、アメリカ合衆国が教皇権の代理勢力であったことを明らかにした。この真理は、黙示録十三章における二本の角を持つ地から上ってくる獣の役割と一致する。というのも、両書は同一であるからである。

また私は、地から上ってくるもう一つの獣を見た。それは子羊のような二本の角を持ち、竜のように語った。彼は第一の獣の前でそのすべての権威を行使し、地とそこに住む者たちに、死に至る傷が治ったその第一の獣を拜ませた。ヨハネの黙示録
13:11-12

ヨハネの黙示録第十三章は、アメリカ合衆国を教皇制の代理勢力として同定している。というのも、地から上ってくる獣は、彼の前にいた海からの獣の「すべての権力」を行使するからである。二節では、異教ローマの竜が、教皇制にその権力と座と大いなる権威を与えた。ここで「権力」と訳されている語は権力そのものを意味するが、十二節で「権力」と訳されているのは別の語であり、「委譲された権威」を意味する。

アメリカ合衆国は教皇権の代理勢力であり、その教皇権は、第二節に示されているとおり、教皇権に軍事的・経済的支援を与えた異教ローマによって予表されてきた。かくして、異教ローマは、教皇権の汚れ仕事を遂行するために自らの「戦車、船、騎兵」をも差し出すことになるアメリカ合衆国をも予表した。

第10節、第11節および第15節の三つの戦いが歴史の中で成就したとき、いずれの戦いにもアンティオコス・マグヌスが関与していた。この事実は、これら三つの戦いにおいて表されている勢力が獣の代理勢力であることを示している。なぜなら、担い手は常にアンティオコスであり、しかも1989年におけるアンティオコスはアメリカ合衆国の代理勢力であったからである。

第十六節の日曜法令へと至る三つの戦いは、アルファとオメガの印を帯びるとともに、真理の構造をも備えている。第一の戦いと第三の戦いにおいてはアメリカ合衆国が主体であり、最初と最後の戦いにおけるアルファとオメガを指し示している。第十六節の日曜法令へと至る三つの戦いは、真理の印も帯びている。ナチス・ウクライナという代理権力は、その中間の戦いであり、ヘブライ語の真理という語の枠組みにおける中間の道標の反逆を表している。この三つの戦いは、1989年から日曜法令に至るまでを表しており、すなわちそれらは第四十節の「隠された歴史」を表していることを意味する。

黙示録11章11節は、両の角が復活する時点として2023年を指し示している。ダニエル書11章11節も、まったく同一の歴史的時期を指し示している。内的な預言の線と外的な預言の線は2023年に一致する。内的な線はダニエルが理解した「事柄」であり、外的な線は彼が

理解した「幻」である。

ダニエルが示す神殿の試験は第二十二日に始まり、また、イザヤが神殿に入った時点である9/11から二十二年後は2023年に至る。イザヤは、十一年間らい病を患って生きたのちのウジヤの死を、9/11において特定している。神殿を建てる業は、まず礎を据え、その後、神殿を建立して冠石を据えることで構成され、こうしてレビ記二十三章に示される祭儀の系列においてラッパの祭りによって表象される第三の試金石へと導かれる。永遠の福音の内的な働きは、外的系列の歴史のうちに成就する。十一節において、プーチンはプトレマイオスによって類型化されており、またウジヤ王は、軍事的成功によって高められ、その後宗教の領域に介入を試みる南の王の例証に対する第二の証人を与える。

南の王は激怒して出陣し、彼、すなわち北の王と戦う。北の王は大軍を繰り出す、その大軍は南の王の手に渡される。南の王がその大軍を打ち破ると、彼の心は高ぶり、幾万の者を打ち倒す。しかし、それによって彼は強められはしない。ダニエル書 11:11、12

ユライア・スミスは、プトレマイオス・フィロパトルの歴史と、彼がエルサレムの神殿で供犠をささげようとした試みを論じている。

プトレマイオスには、勝利を善用するに足る賢慮が欠けていた。もし彼がその勝利の余勢を駆って追撃していたなら、おそらくアンティオコスの王国全土の支配者となっていたであろう。ところが、わずかに幾ばくかの威嚇や脅しを加えることに満足し、獸的情欲の、不断にして抑制なき放縱に身を委ねよう、講和を結んだ。かくして、敵を征服したのち、彼は自らの悪徳に征服され、打ち立て得た偉名を忘却して、饗宴と淫蕩のうちに時を費やした。

彼は成功によって心が高ぶったが、それによって彼が強められるどころではなかった。というのも、その成功を不名誉な仕方を用いたために、自国の臣民が彼に反逆したからである。しかも、その心の高ぶりは、とりわけユダヤ人に対する取り扱いにおいて顕著に現れた。彼はエルサレムに来て、そこでいけにえをささげ、神殿の至聖所に入ることを強く望んだが、これはその場所の律法と宗教に背く行為であった。しかし、大きな困難の末にようやく制止されると、ユダヤ民族全体に対する怒りに燃えながらその地を去り、直ちに彼らに対して恐るべき容赦ない迫害を開始した。ユダヤ人がアレクサンダーの時代以来居住し、最も優遇された市民としての特権を享受していたアレクサンドリアでは、この迫害によって、エウセビオスによれば四万人、ヒエロニムスによれば六万人が殺害された。エジプト人の反乱とユダヤ人の虐殺は、確かに彼の王権を強固にするものでは断じてなく、むしろそれをほとんど完全に破滅させるに足るものであった。ユライア・スミス『ダニエル書と黙示録』254頁。

紀元前217年、ラフィアにおけるプトレマイオス・フィロパトルの軍事的勝利は、プトレマイオスを強めはしなかったが、かえって「彼の心を高ぶらせた」。ウクライナ戦争における勝利も、プーチンを強めはしないが、「彼の心を高ぶらせる」であろう。ちょうど、軍事的成功がウジヤ王の心を高ぶらせたように。

ウジヤは、全軍のために、盾、槍、兜、鎖かたびら、弓、ならびに投石用の投げひもを備えた。彼はまた、エルサレムで、巧みな者たちの発明による器械を造らせ、やぐ

らや城壁の胸壁の上に据えて、矢や大石を放つようにした。その名は遠くまで広まった。彼が驚くべき助けを受けて、ついに強くなったからである。しかし、彼が強くなると、心は高ぶり、自らの滅びを招いた。彼は自分の神、主に背き、主の宮に入り、香の祭壇で香をたこうとした。歴代誌下26:14-16。

戦勝により心が高ぶった南方の二人の王は、同じ神殿に入り、本来祭司だけに許されている供え物を献げようと企てた。いずれの場合にも、祭司たちはその驕り高ぶった王たちの企てを退けた。一方の王はその後ユダヤ人に報復を加え、もう一方の王は額にらい病を打たれた。

祭司アザリヤは彼の後を追って主の宮に入り、彼と共に、勇敢な者たる主の祭司八十人もいた。彼らはウジャ王に立ち向かって彼に言った、「ウジャよ、主に香をたくのはあなたの務めではない。それは、香をたくために聖別された、アロンの子らである祭司の務めである。聖所から出なさい。あなたは咎を犯したのだ。これは主なる神からあなたの誉れとはならない。」そのときウジャは怒っており、香をたこうとして手に香炉を持っていた。彼が祭司たちに向かって怒っている間に、主の宮で、祭司たちの前で、香壇のかたわらにいた彼の額にまで、らい病が生じた。大祭司アザリヤとすべての祭司が彼を見たところ、見よ、彼の額はらい病に冒されていたので、彼らは彼をそこから追い出した。まことに、主が彼を打たれたため、彼自身もまた急いで出て行った。こうしてウジャ王は死ぬ日までらい病人であり、らい病人であったゆえに別の家に住んだ。彼は主の宮から切り離されていたからである。その子ヨタムが王宮をつかさどり、地の民をさばいた。さて、ウジャのそのほかの事績、初めから終わりまでについては、アモツの子、預言者イザヤが記した。歴代誌下 26:17-22

2014年、欧州のグローバリストとオバマ政権は、ウクライナという国家に対してカラー革命を開始した。2022年、ロシアは、最終的にはプーチンとロシアの勝利へと帰結する侵攻を開始した。プーチンとロシアは、南の王であるプトレマイオスとウジャによって象徴される。第十二節は、プーチンの勝利の後に、「彼の心は高ぶり、幾万という多くの者を打ち倒す。しかし、それによって彼は強められることはない」と述べている。その後、歴史は彼の王国の漸次的な没落を記す。

漸次的な衰弱は彼の死をもたらし、アンティオコス大王がラフィアでの敗北に報復する時には、アンティオコスはもはやプトレマイオス・フィロパトルと対峙しておらず、当時エジプトの支配者であった幼い子どもを相手取っていた。子どもは最後の世代の象徴であるから、ある次元では、アンティオコスがパニオンで打ち破る幼王は南の王国の最後の世代である。実際の次元では、その幼王はアンティオコスの強勢に比しての弱勢を表す。

プトレマイオス・フィロパトルとアンティオコスとの間に締結された講和は十四年間続いた。その間に、プトレマイオスは不節制と放蕩によって死に、その子プトレマイオス・エピファネスが継いだが、当時わずか四、五歳の幼児であった。同じ頃、アンティオコスは自国の反乱を鎮圧し、東方諸地域を服属させて安定させたので、エジプトで幼いエピファネスが王位に就いたときには、いかなる企てもなしうる余裕があった。これを領域拡張の好機として見逃すべきでないと考え、（東方遠征において多くの兵を糾合し、巨万の富を獲得していたので）「前にまさる」大軍を起こし、幼君に

対しては容易に勝利し得ると見込んで、エジプトに向けて進軍した。彼がいかなる結果を得たかは、まもなく見るであろう。というのは、ここでこれらの諸王国の事態に新たな錯綜が加わり、歴史の舞台に新たな役者たちが登場するからである。ウライア・スミス『ダニエル書と黙示録』255頁。

南の王

ロシアの最終段階を概説することは、預言上の南の王の最終段階を概説することに等しい。1798年、終わりの時に預言的歴史に登場した霊的な南の王の預言的特質の一つは、彼がいかにして終局に至るかという点である。これはまた、北の王および偽預言者の預言的特質でもある。世界をハルマゲドンへと導く三つの勢力のそれぞれについて、その終局は神の御言葉において明確に特定されている。プーチンおよびロシアに起こるいかなる事柄も、南の王の過去の歩みにおいて既に型として示されているであろう。

霊的な南の王の没落に関する諸例は、その最初の霊的な南の王、すなわち革命期の無神論的フランスの没落によって典型づけられていた。南の王国の没落は、南の王の没落をも包含する。ナポレオンの没落はフランスの没落に対応し、次の南の王国であったロシアの没落とも一致する。現代の南の王としてのロシアは革命に端を発し、ちょうど南の王としてのフランスも革命に端を発したのと同様である。

革命は、南の王たちを象徴する竜の特質である。南の王の主要な象徴である竜はサタンであり、彼が千年期の終わりに革命を試みると、天から火が下って彼を焼き尽くす。初めに天での彼の反逆は、千年期の終わりにおける彼の反逆のアルファであった。

1798年、フランスはフランス革命のさなかに、預言的に霊的な「南の王」として王座に就いた。その革命は欧州諸国を席卷し、ついにはロシア革命へと至り、同年ほどなくしてボリシェヴィキ革命がこれに続いた。

1917年のロシア革命は、二つの主要な段階から成っていた。すなわち、二月革命（ツァーリ制の君主制を打倒し、専制政治に終焉を告げ、ソヴィエトとの二重権力期において臨時政府を樹立した）と、十月革命（ボリシェヴィキ革命とも呼ばれ、レーニンの指導下のボリシェヴィキがクーデターによって権力を掌握し、その結果、ソヴィエト支配が確立され、社会主義／共産主義への道が開かれた）である。

歴史分析および革命理論において（とりわけ、トロツキー、ルクセンブルク、ならびに類比を引くその他の論者によるマルクス主義的視座から）、フランス革命（1789年-1799年）は、しばしばロシアにおける出来事の過程を典型化し、もしくはそのための図式を与えるものと見なされる。これらのロシアの段階を典型づけたフランス革命の二つの段階は、次のとおりである：

- ・ 最初の穏健／立憲の段階（おおよそ1789年から1792年）は、二月革命に相当する。このフランスにおける段階は、バステューユ襲撃、三部会および国民議会の招集、封建的特権の廃止、「人間および市民の権利の宣言」の公布、そしてジロンド派および穏健な改革派の主導による立憲君主制の樹立をもって始まった。これは絶対王政を打倒したが、ブルジョワ／リベラルな統治の諸要素と、二重ないし競合的な権力構造（たとえば、議会となお存続する王権とのあいだ）を保持した。同様に、191

7年2月はツァーリズムを終焉させたが、ブルジョワ的臨時政府とソヴィエトとの二重権力をもたらした。

- ・急進派／ジャコバン派の段階（概ね1792年から1794年にかけて、第一共和政の樹立、ルイ16世の処刑、ロベスピエールおよびジャコバン派／公安委員会の下における恐怖政治を含む）は、十月（ボルシェヴィキ）革命に対応する。ジャコバン派は、より穏健なジロンド派から急進的行動によって権力を奪取し、共和政を宣言し、反革命を鎮圧し、革命をより深い社会変革と内外の脅威に対する防衛へと押し進めた。これは、ボルシェヴィキが臨時政府を打倒し、プロレタリアート／プロレタリアート独裁の支配を確立し、革命的社会主義を推進したあり方を鏡映している。

これらの類似は、革命がしばしば一定の型に従うことを強調している。すなわち、旧体制に対する広範な蜂起（穏健派・ブルジョワ勢力が主導）に始まり、危機のただ中で革命を「救い」かつそれを深化させるために、急進派によるいっそう過激な権力掌握が続く、という型である。ボルシェヴィキ自身もフランスの先例に意識的に依拠し、自らの十月蜂起を、反革命を阻止し革命の可能性を実現するために不可欠な、ジャコバン派のクーデターに類するものと見なしていた。

この類型は、トロツキーの『ロシア革命史』（そこではロシアにおける二重権力期がフランスにおける類似の力学と明示的に比較されている）や、ロシアの出来事に関するローザ・ルクセンブルクの著作に見られる。後者において彼女は、ロシア革命の第一期（3月から10月）がフランス（およびイギリス）の革命の図式に従っており、ボルシェヴィキによる権力掌握がジャコバン派の台頭に対応すると指摘している。

イエスは常に、終わりを初めによって例証する。そして、南の最初の霊的な王としてのナポレオンの没落は、革命初期の道標に従い、そうすることによってソビエト連邦の没落を象徴した。

フランス革命の二段階がロシア革命の1917年二月・十月の段階を予型したのと同じの類型論的枠組みのもとで、ナポレオンの漸進的（段階的）な没落は、ソ連の漸次的衰退と1991年の崩壊に緊密に符合する。この平行関係は、急進的頂点後の体制固め（ボナパルティズム）の段階と、その必然的解体にまで及ぶ。これは、一般史的なパターンとマルクス主義的分析（とりわけトロツキーが『裏切られた革命』および関連諸著作で展開した分析）の双方に拠っており、そこではナポレオンはボナパルティズムの原型とみなされる。すなわち、革命の急進的頂点の後に出現し、諸階級のあいだで均衡を図り、革命の構造的な主要成果を保持しつつ（その民主的推進力は抑圧し）、個人支配の軍事・官僚的帝国を築き、過剰拡張ののち段階的崩壊に見舞われ、旧秩序の部分的復元へと帰結する強権的指導者体制である。

ナポレオンのボナパルティズム的台頭はスターリン主義体制の確立と並行するジャコバン派の急進期とテルミドールの反動（1794年）ののち、不安定な総裁政府（1795年～1799年）を経て、ナポレオンによるブリュメール18日のクーデター（1799年）により統領政府が樹立され、さらに帝政（1804年）へと移行する。ナポレオンは、ブルジョワ革命の成果（ナポレオン法典、封建的特権の廃止、強力な中央集権国家）を法典化しかつ国外へ輸出するが、それらを権威主義的支配、軍事的栄光、ならびに新たなエリート

に従属させる。

ボリシェヴィキ／十月の急進的段階と初期ソヴィエトにおける諸実験の後、官僚的変質が始まる（とりわけ1920年代半ばから）。スターリンによる権力の確立は左翼反対派を打ち破り、「一国社会主義」を強制し、警察的・軍事的・官僚的独裁を樹立する。計画経済と国有化された財産（十月の核心的成果）は維持されるが、特権的カーストの道具へと転化し、国際主義は放棄される。

いずれの場合にも、革命的エネルギーは「凍結」され、単一の人物または機構のもとで国家権力と拡張へと振り向けられる（トロツキーは、スターリン体制を明確に『ソヴィエト的ボナパルティズム』の一形態と呼び、それを統領政府よりもナポレオン帝政に近いものと見なした）。

段階的崩壊

これが中核的な整合である——衰退とは単一の突発的出来事ではなく、過度の拡張、内在的矛盾、軍事的泥沼、周縁に対する統制の喪失、改革の失敗、そして最終的な解体／復興によって駆動される、段階的な侵食の連鎖である。

ナポレオン側（1812年から1815年まで）

- ・ 1812年：壊滅的なロシア侵攻—グラン・ダルメ（兵力60万）は、兵站、厳冬、抵抗により壊滅的打撃を受けた。破局的な転換点；威信と兵力の甚大な損失。
- ・ 1813年：彼に対抗する連合が結成され、ライプツィヒの戦い（「諸国民の戦い」）で敗北—ドイツの同盟国と領土を喪失し、帝国は縮小し始める。
- ・ 1814年：連合軍がフランス本土に侵攻。パリ陥落。ナポレオンは退位し、エルバ島へ追放される。
- ・ 1815年：一時的な復位（百日天下）、ワーテルローの戦いでの最終的敗北；セント・ヘレナ島への終身流刑；ブルボン王政の復古（革命の成果に対する反動的な逆行。ただし全面的ではなく、法制・行政面の一部の変更は存続した）。

ソ連側（1970年代から1991年まで）

- ・ 1970年代後半～1980年代：経済停滞（ブレジネフ体制下の「ザストイ」）、慢性的な物資不足、技術的遅滞、そして米国・NATOとの過酷な軍拡競争—構造的過剰拡張が経済を空洞化させ始める。
- ・ 1979年—1989年：アフガニスタン戦争——ソ連の「ベトナム」；泥沼は資源と士気を消耗させ、国際的威信を損なう（皮肉な符合に留意されたい：ナポレオンはロシアで壊滅し、ソ連は陰峻で頑強な抵抗の戦域で出血を強いられた）。
- ・ 1985年～1989年：ゴルバチョフのペレストロイカ／グラスノスチ改革（体制の「救済」を試みるもので、ナポレオン末期のいくつかの調整に比せられる）が、却って矛盾を顕在化させ、その進行を加速させた；東側陣営の衛星諸国は蜂起して離脱し（1989年11月9日にベルリンの壁が崩壊し、1989年から1990年にかけて諸政権が崩壊）—「外的帝国」の喪失であり、まさにナポレオンが同盟諸国を失ったのと同様

である。

- ・ 1990～1991年：国内の民族主義的危機、各共和国が主権を宣言；1991年8月の強硬派クーデターは大失敗に終わる；1991年12月25日、ゴルバチョフが辞任；ソ連は解体して15の国家となる。続いて資本主義的復古（エリツィン期のショック療法、オリガルヒ、民営化）が進行—ブルボン王政復古に比すべきものであり、革命前の階級的諸要素（あるいはその相当物）が復帰し、若干の行政的諸形式を保持しつつ、革命的な所有関係の全面性を後退させる。

いずれにおいても、「帝国」（フランスの大陸封鎖体制 対ソ連の東側ブロック/COMECON の影響力）は、周縁から中枢へと断片化が進み、内部の腐朽が加速し、最終的な危機がその空洞性を露呈させ、旧来の社会的諸力（君主制/資本主義）が復権する。ボナパルティズムは持続不可能であることが明らかになる—トロツキーの言を借りれば「先端の一点に均衡して立つピラミッド」である—。それは、敵対的な外的圧力のただ中で、革命の民主的基盤を抑圧しつつ、その経済的基盤を（防衛はするが歪めながら）維持することに依拠しているからである。ソ連の崩壊は、長期的に見れば「突然」ではなく、漸進的な内的腐朽の帰結であった。同様に、ナポレオンの帝国も一夜にして消滅したのではなく、連続する敗北を通じて侵食され、ついに復古へと至った。

フランスとソビエト連邦の始まりと終焉は、ウジャ王とプトレマイオスの証言と符合している。プトレマイオス四世フィロパトルは、ラフィアの戦い（紀元前217年）において北の王（アンティオコス三世）に決定的勝利を収めたが、「それによって強められることはない」。彼は優勢を追及するのではなく講和に転じ、贅沢と自己高揚へと戻り、さらに（『第三マカバイ書』1-2章に保存された記録によれば）凱旋後にエルサレムを訪れた。心が高ぶった彼は、自ら至聖所に入り、自身で供犠を献げようと試みた。これはまことの神に対する僭越と反抗の行為であった。彼は神に打たれて（麻痺に陥り）、辱めを受け、やがて神の民への迫害へと向かった。その後の治世は、死に至るまで、道徳的頹廢、内乱、そして勢力の衰微という漸進的没落の時代となった。これは、軍事的成功ののちに心が高ぶったウジャ王（歴代志下26章16-21節）の正確な鏡像である。彼はついで香をたくために神殿に入り（祭司職を僭して）、額にらい病を打たれた。これは公の、可視的な裁きであった。その時以後、ウジャは主の宮から断たれ、隔離のうちに死に至るまで暮らした。即時の滅びではなく、緩慢に長引く死であった。

両者はいずれも南の王であり、その高慢はエルサレムの神殿への侵入として顕在化し、その後、即時の崩壊ではなく、漸進的かつ侵蝕的な終焉へと至る。これが、後代のすべての「南の王」に対する類型論的な範型である。

1798年：フランスは霊的な南の王となる

「終わりの時」（1798年）に、無神論的フランス（エジプトの霊的特性—すなわち、黙示録11:8に見るような神への公然たる否認—を顕現させたばかりの勢力）は、教皇を捕囚とすることによって北の王（教皇権）にぶつかる。ナポレオンは、そのぶつかりの軍事的体現である。古代エジプトが体現したのと同じの無神論的精神を称揚するがゆえに、1798年にフランスは南の王の冠を戴く。

しかし、プトレマイオスが「勝利を最大限に生かす」ことができなかつたのと同様に、フランス革命の急進期も、その成果を持続させることも、完全に輸出することもできなかった。無神論の哲学が成熟し、統治における新たな声を見いだすにつれて、南の冠は先へと移っていく。

進歩的指導性の象徴：ナポレオンからレーニンへ、そしてスターリンへ

この三つは恣意的なものではない。いずれも段階的な終局であり、それぞれが、南の王が自らの緩慢な解体へと向かう軌跡における、さらに一段先の段階を表している。ナポレオン——1798年以後の最初の大きい象徴である。彼はエジプト（字義どおりの南）で勝利を収めたが、過度に拡張し、1812年のロシア遠征は大惨事となり、それを端緒として彼の帝国の周縁部における段階的な敗北の連鎖（1813～1814年）が始まり、最終的敗北（1815年ワーテルロー）を喫し、二度の流刑に処される。ナポレオンは、プトレマイオスおよびウジヤの場合と全く同様に、漸進的・段階的な没落を体現している。

レーニンは1917年の十月革命において王冠を奪取した。ボルシェヴィキの「攻勢」は、旧秩序（宗教的権力を含む）に対する戦争を継続する。しかし、急進的段階は安定化しえず、レーニン自身の健康は早くから衰え、体制は官僚制化し始める。

統合者たるスターリン（ソヴィエト・ボナパルティズム）は、革命を「凍結」して軍事官僚的帝国へと固定化し、その中核的獲得物（国有化経済、ナポレオン法典に並行する反封建的対応物）を保持するが、権力を内向き（粛清）および外向き（拡張）へと転じる。しかし、心は無神論において高ぶり、体制は真に「その勝利を最大限に生かす」ことができず。過剰拡張（アフガニスタン、ナポレオンのロシアに並行）、停滞、改革の失敗（ペレストロイカは最後の絶望的試みであった）、衛星諸国の喪失（1989～90年＝「同盟者」の喪失）、そして最終的解体（1991年）。

ソビエト連邦の崩壊は突発的ではなく、漸進的であった。すなわち、ナポレオンの帝国が一步一步蝕まれていったのとまさに同様に、またプトレマイオスとウジヤの治世が神殿をめぐる驕りの時の後に凋落していったのと同様であった。「霊的」な南の王（政治体制としての無神論）は、自らの長引く裁きを受けた。すなわち、内側から空洞化し、虚偽を支えきれず、北の王（権力の空白における教皇権の復権）の対運動の中で押し流された。

フランス革命（二段階）は、ロシア革命（二月と十月／ボルシェヴィキ）を予表する。ナポレオンのボナパルティズムと漸次的没落は、スターリニズムによる体制の確立と集権化、ならびにソ連の漸次的没落を予表する。これらすべては、ダニエル書11章における南の王の系譜の現代的展開であり、プトレマイオスのラフィアにおける失敗と神殿に対する驕慢から、ウジヤの同一の罪と緩慢な終焉を経て、1798年のフランスと、その勝利によって自己を強化し得なかつた無神論的後継者（レーニン-スターリン期）へと至る。

レーニン——急進的な創始者、あるいは権力の篡奪者（ジャコバン派／ボルシェヴィキの台頭に並行し、1917年以後の「押し」の局面は、ブリュメール後のナポレオンの初期統領政府に類する）。スターリンはボナパルティズム的な統合者であった（ソ連帝国の建設者、粛清、第二次世界大戦の勝利、冷戦の最盛期；無神論において心が高ぶったが、

長期的にその勝利を完全に「強固にする」ことはできず-過度の拡張が始まる)。

フルシチョフは、最盛期を過ぎた「雪解け」期の指導者(1953年から1964年)であり、スターリンを糾弾(1956年の「秘密演説」)、一部の腐敗を暴露し、限定的な改革を試みたが、体制的矛盾の解決には失敗した。これは、「テルミドール」的、ないし衰退初期の位相に相当する。すなわち、恐怖政治は緩むが、中核の無神論的構造は存続し、それにもかかわらず威信は侵食されていく(例えば、1962年のキューバ・ミサイル危機における屈辱は、のちの大規模な敗北に先立つ小規模なナポレオンの挫折を映す)。

ゴルバチョフは(1985~1991年)、体制を「救う」ための土壇場の試みとしてペレストロイカ(再編)とグラスノスチ(開放)を掲げた窮余の改革者であったが、それらはかえって崩壊を加速させ、東側陣営の喪失(1989年のベルリンの壁崩壊)と内部の反乱を招いた。これは「漸進的終焉」の最も明瞭な標識である。すなわち、1814年の侵攻に先立つナポレオンの遅きに失した調整の試み、あるいは神殿の驕りの後に長引いたプトレマイオス/ウジヤの衰退に比すべきものである。1989年におけるゴルバチョフと教皇ヨハネ・パウロ二世(北の王)とのコンコルダート/会見は、霊的敗北を象徴する-すなわち、南の王の無神論が教皇権の再興に道を譲ることを示す。

エリツィンは、最終的解体の象徴的人物(1991年以降)であり、1991年8月のクーデターへの抵抗を主導してロシアの大統領となり、ソ連の解体(1991年12月)を監督し、ショック療法による民営化と資本主義体制の復古を推進した。彼は、革命以前の諸要素(寡頭制的資本主義)の混沌とした終末と部分的な「復古」を体現しており、ナポレオン後のブルボン朝の復辟に比すべきものである。南の王の宮殿は一掃され、北(米国との同盟を通じた教皇権)による旋風のごとき征服というダニエル書11章40節の成就となる。

予型論は、即時の没落ではなく、遷延する段階的裁きを強調する。それは、プトレマイオス四世のラフィアの勝利が高ぶり、神殿侵犯、神罰、そして緩慢な衰亡へと連なる過程を示すのと同様であり、また、ウジヤがツアラアト(らい病)のゆえに死に至るまで隔離されたこと、さらにはナポレオンの段階的敗北(ロシア、ライプツィヒ、パリ、エルバ、ワーテルロー)にも照応する。ソ連の線では、スターリンのもとで勢力が極大に達し、フルシチョフの雪どけにおける漸進的な空洞化が体制の亀裂を露呈させる。ついでブレジネフ期の停滞、さらにゴルバチョフの改革が加速因となり、エリツィン期において一掃が成就する(ソ連は解体し、無神論の政体的形態は終焉する)。「心が高ぶる」現象はこの線全体にわたって顕現する(無神論的反抗)。しかし、誰一人として「勝利の利を取り尽くす」ことはない。

南方の諸王の終局は漸進的であり、サタンの滅亡は十字架において始まり、最終的には彼は千年間追放され、その後に死に至る。

そして、私は天から下って来る一人の御使いを見た。その手には、底知れぬ淵の鍵と大いなる鎖があった。彼は、あの古い蛇である竜、すなわち悪魔でありサタンである者を捕え、これを千年の間、縛り付け、底知れぬ淵に投げ込み、閉じ込め、彼の上に封印を施した。これは、千年が満ちるまで、彼がもはや諸国民を惑わすことのないようにするためである。その後、しばしの時のために、彼は必ず解き放たれなければならない。

また、わたしは王座を見た。そこに彼らが座し、さばきが彼らに委ねられた。さらに、イエスの証しと神の言葉のゆえに斬首され、かつ獣にもその像にも拝せず、額にも手にもその刻印を受けなかった者たちの魂を見た。彼らはよみがえって、キリストとともに千年の間、統治した。しかし、そのほかの死者は、千年が終わるまでは、よみがえることはなかった。

これが第一の復活である。第一の復活にあずかる者は幸いであり、また聖である。そのような者に対しては、第二の死は何の力もない。彼らは神とキリストの祭司となり、彼とともに千年の間支配する。

そして、千年が満了すると、サタンはその獄から解き放たれ、地の四方にいる諸国民、すなわちゴグとマゴグを惑わしに出て、戦いのために彼らを召集する。その数は海の砂のようである。彼らは地の広いところによって来て、聖徒たちの陣営と愛する都を取り囲んだ。すると、天から、神のもとより火が下り、彼らを焼き尽くした。彼らを惑わした悪魔は、獣と偽預言者のいる火と硫黄の池に投げ込まれ、昼も夜も、世々限りなく、責め苦に会うであろう。ヨハネの黙示録 20:1-10。

次稿では、ダニエル書第十一章十一節から十五節における南の王の考察を続ける。

『The Time of the End』誌は1996年に刊行され、1989年に封印が解かれたダニエル書の預言を提示している。最近、ChatGPTがこの雑誌を読み、同誌において提示されている第四十節の歴史におけるウクライナの役割の評価を求められた。以下は、三十年間公の記録となっている当該雑誌の内訳である。雑誌に収められたエレン・ホワイトの著作からの最初の一節は、『Testimonies』第9巻、11である。

概要：預言的枠組におけるウクライナ

同誌のダニエル11:40-45に関する預言的概説の中で、ウクライナは、ソビエト連邦の崩壊および教皇権（北の王）と無神論的共産主義（南の王）との闘争との関連において論じられている。ウクライナは、とりわけウクライナ・カトリック教会と、ソビエト支配下で数十年にわたる抑圧の後にその合法化がなされたこととの関係において、代理戦争の終結段階における重要な宗教的・地政学的戦場として提示されている。

この雑誌は、ダニエル書11章40節における、より広範な預言的成就の一部としてウクライナを提示し、バチカンとアメリカ合衆国の同盟によって南の王が押し流されることを叙述している。ウクライナは、ソ連の無神論の弱体化と東欧におけるカトリックの影響力の再興の証左として示されている。

北の王と南の王との間の戦争におけるウクライナ

本誌は、南の王は無神論であり、それはまずフランス（1798年）に、後にはソビエト・ロシアにおいて体現された、と教える。北の王は教皇制であり、ダニエル書11章40節は、1798年に始まり、1989年のソビエト連邦の崩壊において頂点に達する霊的戦争を記述している。ウクライナは、この文脈において、ダニエル書11章40節の成就の中で一掃されるソビエト圏の一部として現れる。本誌は、ソビエト連邦の崩壊を、教皇制が負った致命的な傷の癒やし（黙示録13章）の第一歩として提示している。

ウクライナ・カトリック教会の弾圧（引用資料）

本誌は、ソビエト政権下におけるカトリック迫害に関する世俗的文書資料を所収する。

『タイム』誌（1989年12月4日号）より：

第二次世界大戦後、激しいが概して流血の少ない迫害がウクライナと新たに成立したソ連ブロックに広がり、数百万人のローマ・カトリックおよびプロテスタント、ならびに正教会の信徒に及んだ。

ウクライナは、共産主義体制下でカトリック教が弾圧された主要な地域として特定されている。

ウクライナ・カトリック教会の法的公認

ウクライナをめぐる討議の主要な焦点は、長期にわたり禁圧されてきたウクライナ・カトリック教会の合法化である。

『ライフ』誌1989年12月号より：

チェコスロバキアにおいて、最近、新たに三名のカトリック司教が任命された。また、今月、ゴルバチョフはイタリア訪問中に教皇ヨハネ・パウロ二世と会談を行う。これは、クレムリンとバチカンの指導者の間で初めての直接対面となる。これらの会談は、ソビエト連邦において長年にわたり非合法とされてきたウクライナ・カトリック教会の合法化に結びつく可能性がある。

『U. S. News & World Report』1989年12月11日号より：

宗教の自由の復活には、信徒数五百万人を擁するウクライナ・カトリック教会に対する公的な禁止措置の解除が含まれると見込まれている。同教会は、スターリンが1946年にロシア正教会への編入を命じて以来、地下で存続してきた。ウクライナ教会の合法化を勝ち取ることは、教皇にとって主要な目標の一つであった。

雑誌はこれを、無神論的支配の弱体化とカトリック勢力の回復の証左として提示している。さらに、これがバチカンの外交的圧力の直接的帰結であり、ダニエル書11章40節の成就における一里塚であるとされ、旧共産圏において教皇権が影響力を回復しつつあることの可視的な実例としてウクライナが示されている。

教皇制の前進の証左としてのウクライナ

共産主義の崩壊は、単なる政治的変化ではなく、無神論の霊的敗北であり、教皇権の地政学的前進、そして教皇権が世界的覇権へと復帰し始める始まりである。ウクライナは、ソ連の宗教抑圧の解体に関する事例研究であると同時に、東欧におけるローマの戦略的勝利を示すものとなる。それは、強制された無神論から回復されたカトリック権威への可視的転換を示し、ウクライナ・カトリック教会の合法化は、北の王が南の王を「旋風のように」一掃していたという預言的確証とみなされる。

ウクライナとより広範な預言的時系列

1. 1798年—教皇制が致命的な傷を受ける.
2. 1917年 - 無神論がロシアへ移る（ボリシェヴィキ革命）.
3. 1989年—ソビエト連邦崩壊.
4. ウクライナにおいて、カトリック教会が合法化された.
5. 教皇権は地政学的影響力を回復する.
6. アメリカ合衆国は最終的に教皇権の影響下に入る（ダニエル書11:41）.
7. 全世界が従う（ダニエル書11:42-43）.

ウクライナは、ソ連の無神論と回復した教皇権の影響との間の移行過程の一環として、第3～第4段階に位置づけられる。

ウクライナに関する討議における参考文献

- ・ ジェフ・ピッペンジャー（主要な神学的枠組み）

預言の霊

- ・ 大争闘
- ・ 精選されたメッセージ
- ・ 教会への証し

世俗の報道機関

- ・ タイム誌
- ・ ライフ誌
- ・ U.S. ニュース&ワールド・レポート

ウクライナは、以下の事柄に関連して言及される：

- ・ 第二次世界大戦後のカトリック教徒に対する迫害
- ・ ウクライナ・カトリック教会の地下における存続
- ・ ゴルバチョフ-バチカン間の外交
- ・ カトリック教会の聖統の法的回復

ニュースレターにおけるウクライナの役割の概要

ウクライナは、ソ連の無神論体制下において抑圧されたカトリック信仰の拠点であった。ウクライナ・カトリック教会の合法化は、南の王の弱体化を告げた。ウクライナにおけるバチカンの影響力は教皇権の再興を示し、また、ウクライナの宗教的転換は、ダニエル書11章40節が成就しつつあることの具体的証拠となった。ウクライナを巡る出来事は、教皇権の致命的な傷の癒しにおける第一段階の一環をなした。ゆえにウクライナは、孤立した政治的事件としてではなく、ダニエル書11章の終末的展開の中における預言的指標として提示される。